

⑤ ジェーン・オースティン 著 パーカー敬子 訳
『エマ』

(近代文藝社)

新訳です。これまでもいくつかの邦訳が出ていますが、オースティンの英語をどんな日本語に置き換え、どう表現するかは、訳者のセンス次第、まさに十人十色です。読み比べてみてはじめて、日本語で表現するときのちょっとした言葉遣いの差が、たとえば登場人物の心境の解釈に微妙な差をもたらすことが分かります。楽しい作品は何度読んでも面白く読むごとに味わいや発見もありますよ。

では、少しおっちょこちょいのエマが巻き起こす恋の悲喜劇を、最新の翻訳でお楽しみください。

933 ||Aus (N.T.)

⑦ ベルナルド・ルブラン、
ミシェル・ルフェーブル 著 太田佐絵子 訳
『ロバート・キャパ』

(原書房)

この本は5つの戦争取材した20世紀を代表する戦場カメラマン、報道写真家として有名なロバート・キャパの評伝です。本書には2007年に発見された未発表資料300点(写真、手紙、刊行物)などから、新たな人物像が描かれています。「崩れ落ちる兵士」という作品で一躍有名になりますが、数々の疑惑があります。彼は「生と死が五分五分なら、またパラシュートで降りて写真を撮るよ」という言葉を残しています。複雑で波乱に富んだ生涯は未だに魅力がありひきつけられます。

740.253 ||Leb (M.T.)



⑥ 橘玲 著
『不愉快なことには理由がある』

(集英社)

この、目を引く本のタイトルに反応して本を手に取りました。「不愉快」をどの様に解明していくのだろうと思いながら読み始めました。本書は「そ、そうだったのか!? 真実のニッポン」を再構成されたものです。社会問題から我々の周りに存在する身近な出来事まで、橘氏独自の視点で批評されています。世の中に起こるさまざまな問題は一筋縄で解決できる簡単なものは多くありませんが、「科学的に」、「遺伝子学的に」と説明されると少し気が楽になることもあるかもしれません。

304 ||Tac (Y.H.)

⑧ 朽木ゆり子、福岡伸一 著
『深読みフェルメール』

(朝日新聞出版)

トレーシー・シュバリエ原作の小説『真珠の耳飾りの少女』と、2003年に公開された映画の大ヒットが、フェルメールブームのきっかけとなりました。

本書は、自称フェルメールマニアの2人、ノンフィクション作家、朽木ゆり子氏と生物学者、福岡伸一氏のフェルメールについての対談をまとめたものです。

日本人が、フェルメールを好む理由のひとつとして、37点と作品が少なく、八十八カ所めぐりなどが好きな日本人に、「全作品を見て回りたい」と思わせるのではないかと朽木氏の分析に納得させられます。

723.359 ||Kuc (A.U.)